

者は約50名で、盛大に開行されました。69会が半数を占める偕行合唱団（和田代表）も歓迎を行いました。

明生、正本禎亮、森充、和田明範。

69会からの参列者は次の7名。

柳澤壽昭、今野茂雄、渡邊榮樹、神保

明生、正本禎亮、森充、和田明範。

## 同期生訃報

ご逝去を悼み謹んで冥福を祈ります。

・勝美治様（令和5年8月13日）

・重松正久様（令和7年1月24日）

・益田修様（令和7年7月6日）

・赤谷信之様（令和7年7月12日）

・熊本毅様（令和7年7月22日）

## 最後に

新年における皆様のご多幸と益々のご発展をお祈りいたします。



## 青森県偕行会

町集会所で初の青森県総会

会長 稲村孝司 陸自75

青森県偕行会は、晚秋の10月25日、会長が町会長を務める町会集会所会議室において令和7年度の総会を開催した。昨

年までは旧弘前偕行社での開催を慣例としていたところ、同偕行社が弘前市管理となり、無料だった貸館使用料が生じることから同集会所での開催となつた。

今年は大きな報告・審議事項があり、

今までの全国会長会議で問い合わせられた。(1)「公益財団法人としての業務を整

齊と行えるか?」(2)「会員の高齢化、会員の減少の中、活動は可能か?部隊との

交流、会員獲得は可能か?」(3)「支援金が減少する中、活動は可能か?」である。

総会は、例年の国歌斉唱、物故者への黙祷及び自己紹介を省略し、会長挨拶、

次いで事業報告及び会計報告を手短に済ませ本題に入った。

まず、約1時間かけて会員の目的である「支部化（公益財団法人化）へ移行するには厳しい状況」について、7個の偕行会が活動を停止したこと、会員の高齢化と会員の減少に悩んでいること、各地偕行会への支援費の捻出が厳しくなっていること、公益財団法人に対する業務の監督が厳しくなったことを報告した。

次いで、陸修偕行社と各地偕行会との連携と課題等について昭和27年から令和6年までの経緯をたどり説明した。特に、令和3年には「当面の間は『緩やかな関係』を維持する」将来的には公益財団法人としての透明性確保の必要性に加え

本部と支部の関係に移行することの

年までの経緯をたどり説明した。特に、令和3年には「当面の間は『緩やかな関係』を維持する」将来的には公益財団法人としての透明性確保の必要性に加え

本部と支部の関係に移行することの

年までの経緯をたどり説明した。特に、令和3年には「当面の間は『緩やかな関係』を維持する」将来的には公益財団法

人としての透明性確保の必要性に加え

本部と支部の関係に移行することの

検討が始まり、各地偕行会の意向確認が必要とされ、検討すべき課題が明らかにされた事を強調した。

引き続き、支援費等の推移（経費面での課題）について、昭和32年から支援費支給が始まわり、平成24年頃から逐次拡大、増額され、同29から30年度には460万円程度まで拡大されたものの、令和に入り逐次削減され、穴見財團の助成金によります。

の課題について、昭和32年から支援費支給が始まわり、平成24年頃から逐次拡大、増額され、同29から30年度には460万円程度まで拡大されたものの、令和に入り逐次削減され、穴見財團の助成金によります。

する。特に、事業計画書・収支予算書・事業報告書・収支決算書等の作成と報告は、「定型用紙での作業」と「定められた時期迄の業務」が求められることを強調した。(2)政治活動が出来ないなどの活動の自由がなくなる。(3)独自の資産の保有は出来ない。資産の運用は、法律に基づき実施するとともに、内閣府報告を伴うことである。

公益財団法人陸修偕行社の活動紹介では、昨年12月5日に当会主催の「防衛講話の開催」に対する協力事業の紹介があつたことを報告した。

報告・説明の最後には「支部の活動における隊友会との関係」について、陸修

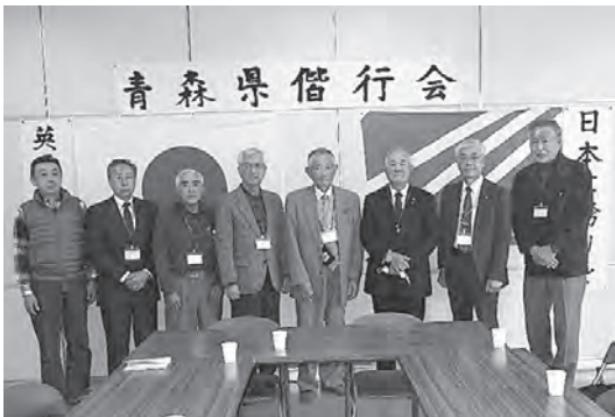
会は隊友会との関係を整理して設立されたことを述べた。その内容は「隊友会と陸修会は相互補完の関係にあり、会員は陸修会と隊友会とのダブルキャップである」と述べた。

陸修会は隊友会とのダブルキャップであることが大変であるとされたことを述べた。更に、陸修偕行社も、陸修会と隊友会の関係を踏襲することを説明した。

約10分の休憩の後に、意見交換を始めた。会員の多くは隊友会会員でもあり、平成23年から始まつた隊友会の公益社団法人化への移行を体験した支部長が二人居り、小生も副支部長として規約の変更及び規則類の制定に苦労し、更に法人化移

行後の業務、事業計画書・収支予算書、事業報告書・収支決算書等の作成と報告は、「定型用紙での作業」と「定められた時期迄の提出」には、困難を極めた事が脳裏に刻まれていた。そのことから、現在の会長、副会长一人、事務局長は会長兼務、会計部長の態勢では「業務を整齊と行うのは極めて困難」との結論に達した。

次いで、会員の高齢化、会員の減少の中、「公益事業を主とした活動はほとんど不可能」また、部隊との交流、定年退職幹部の名簿入手が困難の中、会員獲得は「ほとんど不可能」との結論に達した。最後の支援金が減少する中、公益事業を主とした活動は「困難」との結論に達した。一縷の望みとして、会員の多くは隊



友会とのダブルキャップであり、これまでも通り隊友会と共同での活動は可能であろうとの意見だった。また、態勢強化策として、副会长一人の追加と事務局長の人選が必要とされた。陸修偕行社への要望事項も挙げてはとの意見もあったが、今回は問い合わせられた三つの問題への回答たげに絞るべきとの結論に達した。

写真撮影の後、引き続く懇親会は9名の出席となつた。約2時間の会話では、今後の会運営は益々厳しさが増す状況となることが確認された。弘前市の状況をみてもこの8年間で2万人の人口減少があるとか、5年に一度の国勢調査を務める調査員からは留守家庭が多く調査が困難な状況が、町会長からは町会運営の厳しさ、民生委員のなり手がないことが、地区保護司会会长からは保護司のなり手がないことなど愚痴の語り合いとなつた。来年春の花見は旧弘前偕行社での開催を諦め、安原第一児童公園で行うことを告げ、再会を期してみつわ会館を後にした。

## 北海道偕行会全道大会

北海道偕行会（代表世話人陸白65期木村清順）は第80回北海道偕行会全道大会を、ご来賓に北部方面総監部幕僚副長・